

# SHISEIDO GALLERY

## ギャラリートーク

### 「Saraça vision」

ナビゲーター／伊藤佐智子氏 日時／2003年10月8日(水) 18:30～19:30

会場／資生堂ギャラリー

樋口(司会) この「Saraça vision」展の総合ディレクションをやっていただきましたファッション・クリエイターの伊藤佐智子さんをお招きしてお話を伺いたいと思っております。よろしくお願いいたします。

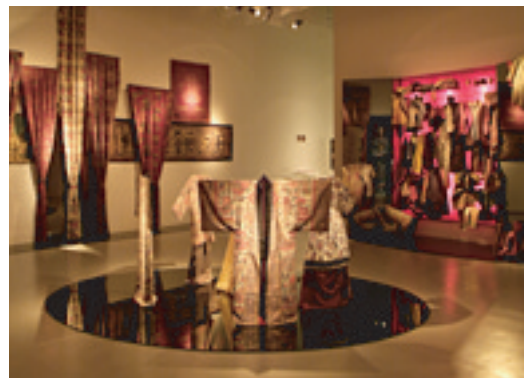
伊藤さんは、皆さんご存知だと思いますが、ファッションの世界のみならず、舞台美術であるとかCDジャケットのデザインであるとか、あるいは資生堂の化粧品を含めさまざまな高感度のグッズのプロデュースですとか、非常に幅広く御活躍なさっている方です。今回の「Saraça vision」展も、このギャラリーの展示、構成だけではなく、1階のウインドーディスプレイから、ショップで販売しているグッズの企画、それからパーラー、ファロというレストランでも今回「更紗」の特別コースメニューというのを用意しているのですが、そちらのディレクション等々、ビル全館にわたってディレクションしていただきました。

そういう形で常に時代の最先端を切り開くお仕事をなさっているのですが、一方で伊藤さんは非常に骨董好きでいらっしゃいます。先日ちょっと佐賀に仕事で一緒したときに、佐賀の骨董屋さんで何か看板のような扉のような、ちょっとわけのわからないものをお求めになったりしていたのですけれども、そういう古いものと新しいものとは、どのようにご自分の中で結びつくのでしょうか。

伊藤 私は存在のエネルギーというものにすごく興味があって、それは人間もそうですし、それから物もそうで、エネルギーというものには時間も空間もないんですよね。仕事柄、世界中旅をしたりするんですけれども、時代も国も歴史も越えて、古いものが持っているエネルギーというものにより強く惹かれるんですね。それは、私の中にある遺伝子みたいなものが物にすごく反応するんだと思うのです。大体どんなものでも好きなんですけれど、布地というのが、すり込みという言葉がありますけれども、私にとってはすり込みなんです。ですから、布地に引き込まれるというのは割と小さいときからあって、小さな小ぎれでも自分の好きなものは大切にとっておく。キャンディの包み紙もきれいな模様のもはとっておくとか、そういう子供のころからのくせがなくて。

そういう意味で、古いものの持っているエネルギーというのは、例えば三次元の世界を四次元の世界に変えてしまうような広がりを持っているというところが一番大きい魅力ですね。イメージがすごくどんどん湧いてくるんです。

司会 今回は更紗がテーマになっているんですが、更紗に関心を持たれたというの、やはり古いものが持つエネルギーというところが出発点になっているのでしょうか。



©藤田 正義

伊藤 そうですね。更紗の歴史は、紀元前にもあったということも本で読んだりもしていますけれども、15世紀、16世紀ぐらいからのものが残っているものでは多いのです。1世紀にはもう誕生していて、エジプトで発見されたりしているようです。私は無地のものに文様をつけたということが、もう限りなくロマンチックだと思うのです。それは、人間が言葉をつくって人間同士コミュニケーションをしようと思ったことと非常に近いのではないかと思います。だから文様というものは、私にとってはイコール言葉なんです。人と余りきちんとコミュニケーションをするというのが苦手だったこともあって、物とのコミュニケーションの方が私には歴史的に長いのです。文様というのはいろんな思いを伝えていると子供のころからすごく感じていて、そのルーツは更紗なんじゃないだろうかと感じているわけです。

司会 確かに、文様は言葉であると先ほど伊藤さんがおっしゃったように、世界各国に本当に伝播していきましたね、更紗は。

伊藤 この更紗の持っている高い流通性というのが、人々に愛されてきた理由でもあると思うのです。花や草や虫や鳥や、そういったものをテーマにして、木綿の布にこんなに鮮やかな染色というのを見たときの驚きというのは、やはりすごかったんじゃないかと思うのです。ヨーロッパはウールの歴史が長いですし、木綿のこの色鮮やかな、特に今回は茜を中心に構成したのですけれども、この赤い色というのはやはり血が騒ぐというか、血に作用しますよね。

司会 茜と藍が文様染めの原点といますか、始まりというふうに言われているようですね。

伊藤 始まりかどうかわかりませんが、藍は相当古い歴史があると思いますし、茜も同じように古いと思います。茜の葉っぱを初めて見たときに、日本茜なんですけれども、四葉茜、4枚葉でハート型の四方、東西南北を指しているかのように思えたのです。

それは何かを啓示しているというか、更紗がこれだけ世界中を漂流していくことの証というか、象徴のようなものがその茜の葉っぱからも読み取れるような気がするのですね。

あと、茜というものは茜だけでは茜色にならない、焙煎することによって初めて茜色として定着していくというの、何か人間の営みにもすごく似ていて、人間も何かを言っていたり思っていたりするだけではそこで終わってしまうわけで、その思いを人に伝えたりすることによって定着していくというか、とても共通しているように思うんですね。ですから、焙煎によって物が定着している、お互いにその人がいることによってそのことが成り立つということを、このビル全館で表現したわけなんです。

司会 今、お話の中で、人と人とで何かが生まれるということをおっしゃっていましたが、今回の「更紗ビジョン」というタイトルロゴの「更紗」の「更」の字ですね。後でよく見ていただけるとわかると思いますが、下に開くところが人の足のようになっています、非常に細かいところなんです、そういうところまで伊藤さんの思いが込められた展覧会なんですね。そもそもこの資生堂で、しかも全館使ってというアイデアを最初に伺ったときに僕も大変びっくりしたのですが、それを考えついたきっかけは何だったのでしょうか。

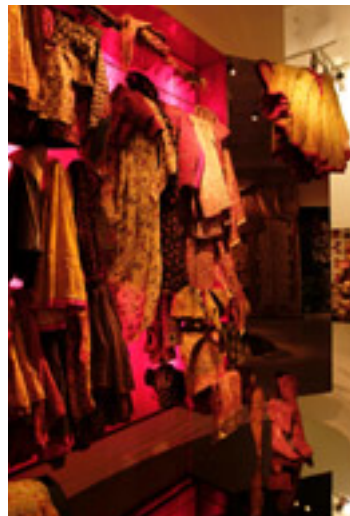
伊藤 いろんなことが結局シンクロしているというか、3年前ですよね、このビルができたのが。そのときに、このビルはすごくもともと人に来てもらいたがっているなというふうに勝手に私が感じてしまったんですね。まずそれが1つと、それから私自身が生命力とか精神力というものに対して、この2~3年それを維持し続けることが大変になってきた。自分ですごく思いはあるのだけれども、日本というのは新しいものとか若いものとかそういうものを使い捨てていく時代なんですよ、今。ですから、本当に物をつくるために京都あたりに電話すると、その会社がつぶれていたり、その職人さんがもう60以上だからといって解雇されたり、何か世の中の流れというのがすごく大事なものを捨てようとしているというふうに感じていて……。

そんなことがあって、更紗という文様はいろんなことを含んでいて、謎が多いというか、謎解きのような気がするんですよ。生命樹なんていうのは皆さん御存知だと思いますけれども、こういうものに関しての学術的なことはここにいらっしゃるの方が私よりもきっと詳しいと思うのです。でも、この生命のおきて、虎は鹿をかんでいたり、孔雀はコブラをくわえていたりとか、そういう生存のおきてみたいなこと。それから、宇宙山のその下には木があって、生命の「木」というのは「気」でもあるわけです。木というのは、このビルでもあるわけですよ。木というのは、皆さんの人間一人でもあるわけです。全部つながっているんじゃないかと思って、更紗の布の展覧会ではなくて、人間の持っている生命力とか精神力、そういうものを具現化するものとして更紗の力をかりられないかなと思ったんですね。

しかも、それには美術館で見るようにガラス越しに見るのではなくて、この物たちが持っているオーラというか、力とかエネルギーを本当に間近で感じるようなことができないだろうかと思ったんです。

司会 皆さんごらんいただいたと思うのですが、非常に斬新な展示になっておまして、大体布の展覧会はガラスケースにしまわれているのが普通なんですけれども、今回はほとんど全部のものがむき出しになっています。他にも伊藤さんはいろんな工夫をなさってまして、例えばそちらのクローゼットであるとか、

こちらのカーテン状にいろいろ吊るしたものとかが、あるいは鏡を沢山使っていたりします。それでどういうことを表現されたかったのか、ちょっと御説明いただけますでしょうか。



©藤田 正義

伊藤 今も申し上げたように、更紗の力をかりて人間が本来持っている生命力と精神力というものを、自分の中にもそれがあるということをもう一度自分自身で見直したかったのです。再生の思いみたいなこと、それから祈りみたいなことがどの布にも全部入っているわけですよ。

これは時代のクローゼットと名づけたのですが、洋服ダンスとかクローゼットというものの中には、その人の好みとかいろんなことが反映されているわけです。この中には、もう世界中の、ヨーロッパからアフリカから日本からインドネシア、トルコとかペルシャとかいろんな国の更紗が時代も越えて詰まっているわけですが、その扉をあけたところの鏡で自分の姿も見ざるを得ない。私は、自分が自分を見るということはすごく大切なことだと最近思うのです。どんなふうな顔になっているとか、そういうことも含めて更紗とともに見ていただけたらと思うのと、子供のときに読んだ童話で、洋服ダンスの中から別の国に行くみたいな話がありましたけれども、そういう誘引するような空間をつくりたかった。その象徴的なものがこの時代のクローゼットなんですよ。

司会 これ見て僕が一番最初に思ったのが、すごくリアルな実感といいますか、当時人々が服を身につけていた感じがすごく上手に表現されているなと思ったんです。そこはやはり最初から意図されていた部分ですか。

伊藤 そうですね。そもそも表現しようと思った方法論として、ムービングライトがちょうど今あそこに……。左の上からずっとゆっくりと明かりが移動しています。ものすごくゆっくりと、この四方を光が移動していくのです。気がつかない方も多いのですが、たまたま気がついた人は、やはり時間の流れとかいろんなことに思いをはせたりするんじゃないかなと思って、こういう明かりにしているのです。

例えばこれはアフリカの更紗なんですよ。これは割と新しい20世紀のものなんですけれども、その隣がインドです。お袖の形とか全部みんな違うわけですよ。それぞれに生きた女性たちのその時代のそのクラスの人たちの姿を想像したらおもしろいと思うのです。



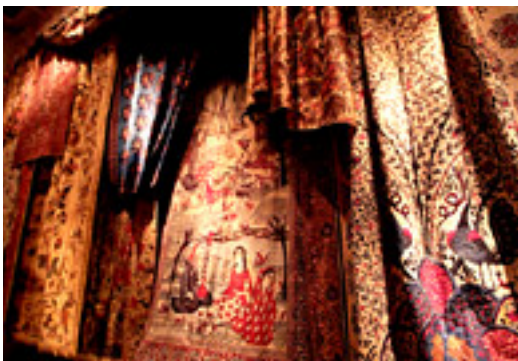
伊藤 佐智子さん

これはマハラジャのスカート、こっちは普通の野良で働く人のスカートであったりするので。金更紗というインドネシアのこれなんかは、非常にクラスの上の人しか持てないものなのですが、いろんなことがイメージできる。今の自分がインスパイアされるための何かであってほしいなと。この展覧会を見た後に、ここで過ごした時間を何年先にも思い出してほしいな、思い出してもらえるような展覧会にしたいなという思いでつくりました。

ここのビルの外側が茜色、レンガ色、スタッコという手法でつくられていますけれども、ここのビルの色と展覧会が非常に呼応するということがあるので、振り向いたときにその茜色と同時に地下のギャラリーから出てきたエネルギーみたいなものを、何となく背中に感じながら帰路についていただきたいなという思いがありました。

司会 伊藤さんとこの展覧会の準備を進める中で、再三伊藤さんの方から、更紗の歴史を見せるのではなく、それをつくった人、あるいはそれを今日まで伝えてきた人たちの思いを表現する展覧会なんだということを知ったのですけれども、本当に展示を見て皆さんにもわかりただけだと思えます。この時代のクローゼットもそうですし、ここの真ん中のステージも、あるいは向こうの壁面にしても、こちらにしても、いろんな国のあらゆる時代のもがミックスして展示してあるわけです。普通こういう展覧会の場合、時代別ですとか、あるいは地域別、ここがインドでここがインドネシアで日本ととかやるのですけれども、それがミックスすることによって世界中に伝播していった更紗の力が表現されていると思います。

こちらは特に生命樹のものを中心に集めていらっしゃるわけですが、ここはやはり生命樹というものの……。



©藤田 正義

伊藤 そうですね。やはり生命の木に関しては本が何冊も出ていますから、今回どんなものでも、この着物1枚にしても、このかけ布1枚にしても、興味を持たれたらそこからいろいろお調べになったらすごくおもしろいドラマを読み取っていただけると思うのです。ドラマというのは人間だけが作り出すものではなくて、物もドラマをつくれると思って、こういう展示にしたのですね。多分あれはシッターダだと思うのですけれども、木の下でああいう瞑想しているわけですが、木の持っている力というのは、花をつけて実がなって、風が来れば葉っぱがそよいでとかというのは、すごくいろんなことを教えてくれると思うのです。ここに掛かっている布を読み取ってほしいなと思いますね。

あそこのきれのあのあたりなんかは、時間を経てやつれているわけですが、あのきれとか、そのインドネシアの彩色布なんかは、鉄を使って染めているために著しくやつれているのですけれども、それが私は物すごく美しいと思うのです。例えばテレビの照明なんかでもそうですけれど、しわを隠そうとしてライティングして、美しいと美しくないというのがすごく一辺倒な時代に入ってきちゃっているのですよね。古いからつまらないとか、古いから何か読みにくいとか、そういうものももちろんありますけれども、そうではない美というのがある、あの辺というのはわざと明かりでそれを出していただきました。そういう人間も物も一緒というか、人間も物も虫も蝶も鳥も、みんな一緒なんだ。1つの大きな宇宙の摂理の中で動いているんだということ、更紗を見ているとすごく感じるのです。だから、悠久の精神みたいなことも教えられるし、とても謎が隠されているんですね。

司会 この大幕なんかも、すごいものですね。

伊藤 これはもう17世紀のムガール帝国の最盛期のもので、私は本当に本でこのぐらいの断片を何度も見て、東博なんかでもそういうものは見えていますけれども、ここまで大きいものは東京ではもちろん初めてですし、ほとんどの方は見てないものです。これがあつたであろう国と時代を想像すると、本当に何か優雅だと思うのです。これが外にたなびいている様子を想像するだけで、時間を忘れるというか、別の世界に飛んでいけると思うのですよね。

文様が、何しろ作画的じゃないのですよね。私は物づくりをしているので、どうしても作画的というものをどこに置くかということと悩むのですけれども、こういうものから教えられるのは作画的を越えたものなんですよ。もっと祈りによって成立している文様というか、祈りによって成立している形だと思うのです。

司会 そういう手づくりのよさといいますかね。今回、手書きのものも結構多数あるのですけれども、木版でプリントしているもの、これなんか木版ですよ。非常に温かいというか、銅板のもの比べると全然違いますよね。

伊藤 そうですね。やはり銅板のものというのは、産業革命以降に生まれたものです。それによって更紗が世の中に広まったというのがあるのですけれども、産業革命というのは1つのグローバル化の始まりだったんですよ。近ごろもそのグローバル化が叫ばれていますけれども、それによって得るものと失うもの大きさというのをやはりわかった上でグローバル化していかないと、大変なことになっていくんじゃないかなと思うのですね。

あそこにターバンが掛かっていますけれども、もうインド人もどんどんターバンをしなくなっているのです。ターバンって、目上の人への尊敬とか、そういうことももとはあつて、あれは何メートルかわかりませんが物すごい長いものなんですよ。

それを巻くことによって、気持ちを整えたりしたんじゃないかなと思うのです。でも、世界中そうですけども、時間に追われるようなことになって、ああいう習慣もなくなっていくわけですよね。結局グローバリゼーションというのは全部が同じふうになってしまうことにつながっていかざるを得ないような気がして…。私が50歳になる前にこれを考えたのですけれども、50になる前に何かこんな世の中に対して自分ができるとか感づいたことをやってみたいなと思って、そこにいらっしゃる小俣さんに相談したのが始まりなんです。こういうことをしたい。

それで、この展覧会ができたのは、更紗と同じように1つの旅でもあったのです。いろいろな所蔵家の方にもお会いして趣旨を説明して、結局ガラス越しではないことを快く引き受けてくださった。やろうとしたことに賛同してくださった方たちの同じような思いがなければ実現しなかったわけです。

私がすごく今回突っ走って、これを資生堂の方と一緒につくったわけですけども、そのときに小俣さんに言われたのは、いいねと言ってくれる人と一緒にやらなければ……。エネルギーの行方みたいなことを言われたんですね。私は最初はそれを知っていたはずなんですけれども、いいねと言ってくれる人とずっといろんなことをつくり上げてきたつもりだったのでですけども、あるときからやはりそんなことはつまらないんじゃないかとか、今なぜ更紗がおもしろいのかとか、そんな意見にも多々遣いまして、でも実はやろうとしていることはこういうことなんだということを説得して回った時期があるんですね。

でも、そういうことを言われて、エネルギーの生かし方というのをもう一度あるとき教えられたのです。アフリカのズールーという地域がありますよね。祈祷師の話で、アフリカの土人の人が体を壊して祈祷師のところに来たのです。そうしたらその祈祷師が、普通だったら「いつから熱が出ているのか」とか、「いつから腰が痛いのか」と言うのですけれども、それがお医者様の役目なんですけれども、その人は「いつから歌を歌わなくなったのか」と聞いたんです。私はそのとき、あっ、そうだ、いつから私は歌を歌わなくなったのかなと感じたんですね。そういうふうには歌を歌わなくなってしまった人がふえると、やばいことになると思うのが、昨今の感じなのです。

ここに集められたものというのは本当に、ある種素朴でありながらクオリティの、志の高いものばかりで、そういうものからいろんなことを読み取っていただけたらうれしいなと思いますし、自分が思った感情を1人が5人に伝えていっていただけたら、もっとたくさんの方に見ていただけることができていると思っています。

司会 あちらは割と日本のものが中心なのですけども、ちょっと場所を変えてお話いただこうと思います。

伊藤 こちらの壁面は断片をずっと並べました。戦前に鈍翁とかの仕覆をつくっていらした方からお借りました。ここの古渡更紗のこの表情、この子供の無垢な感じ、ここに本当に人格が宿っていると思うんですね、この象とこの人。そういうものも、1つ1つ見ていただきたいなと思います。まずこれを裁断するときには相当いろいろなことを考えて裁断されたと思うのです。その断片を、またこのようにきれいに残しておかれる。この断片が、また次の断片を生んでいくものになるわけで、そういうつくられた方の思いというのが、この1枚の布から伝わってくると思うのです。今とこのころとを比較するのはいけないのですけれども、でも何かいとおしくなるのですよね、この小さなものに宿る大きな命というか。



©藤田 正義

この風呂敷もそうです。物を包むというのはすごく意味があることで、私はこの包むということ、そのものの役割も含めてちょっと考えていただきたいなと思って、一応インスタレーションみたいにしてあります。

司会 この裂帳なんかは、ほどいたものも結構まじっているわけですよね。

伊藤 そうですね。こういうもの、みんなそうですね。これとかこれとかもそうですし。

司会 古渡と今呼んでいますけれども、江戸時代にインドから渡った更紗は非常に貴重なもので、そういう小さなものにしかなかったほとんど使えなかったということですね。

伊藤 そうですね。すべて、古渡だけじゃないですけども、江戸時代の話を読んでいるとすごくおもしろくて、本当にみんながもっと自由に、平和な時代があんなに続いたところもないわけで、年間8,000反も更紗が船で渡ってきてるんですね。いろいろな図を見ても、帯に更紗が使われていたりとか、煙草入れに使われていたとか、その陣羽織なんかもそうですね、すごく楽しんでたんですね、もっともっと何かいろんなことが。

司会 この陣羽織なんてすごいですね。色使いというか、こういうきれいで羽織つくってしまうという感覚は。

伊藤 私は時代物の映画とかもやるのですけれども、本当にこういう衣装、例えばヘアスタイル1つにしても、今だと町人は町人の髪型、お武家はお武家の髪型みたいに分かれてはいますが、もうちょっと楽しい部分もあったのですよね。本当にそういうものももっとつくられてもいいんじゃないかなと思いますけれども。

司会 向こうの真ん中にも、また後で見ていただきますけれども、着物が2着あったところですね、更紗の。あれ、下着なんですよね。

伊藤 そうなんです。あその真ん中のところは胴着、男性のものが実は多くて、みんな女性のドレスだと思っていらっしゃるかもしれませんが、真ん中のインドのものも、マハラジャの衣装なのですね。黄色い、金の。後ろにある2枚の着物は、一番上に唐棧を着るのです。江戸時代の札差の衣装としてきちんと残っているものなのですけども、由緒も、ちゃんと出所もきちんとしているものなのです。吉原は一晚で千両箱が動いたというぐらいすごかったわけですよね。唐棧を脱ぐと、最初にあの更紗の花の文様の、あれを着ているわけです。あれを脱ぐと、竹の模様の本当に鮮やかなきれいながありますよね、それを着ているわけです。



©藤田 正義

それを脱いで裸になるという、その時間の過ごし方が本当に想像するだけで目がくらくらするっていう感じですよ。

司会 掛け軸もありますけど、この布もすごいですね。



©藤田 正義

伊藤 そうなんですよ。私は実は鍋島を入れたくて、鍋島更紗というのは佐賀の人もほとんど見てないような、献上物に使われていたし、一般人にはほど遠いものだったりもして、県立の博物館にこれを貸していただきたいと思って行ったのですね。それでこれに出会ったんです。これは正教寺さんというお寺のものなのですが、そのお寺も昔はこれを持っていることを知らなかったそうなんです。博物館の学芸員の方が「おたくに絶対あるはずだから」と余り言うんで探してみても、あつたらしいんですね。普通だったら表装でこういう形をつくるわけですがけれども、同じ判でこういう模様をつくっているわけです。後ろなんかリバティプリントみたいな感じですし、だまし絵なんですよ、全部。表装でなくてこういうものをつくるというその感覚もすごいと思うのですが、この江頭家というのは、もともとは薬を扱っていたみたいで、薬を扱う人というのは染色のいろんなもの、やはり茜が体によかったり藍がよかったりというように、お薬とも関係があるので、そういうことらしいのですが、これは東で一番すばらしいもの、今回の、見ていただきたいなと思ったものの1つなんですよ。

あと、このお座布団なんか、今は本当にこういう、「座ってください」というようなお座布団というのは、もうつくられてない気がするんですね。このお座布団1つにも、その存在の理由があるというか、その存在のエネルギーがあるというか。

この桃の香炉もそうですけれども、これは鍋島の桃の香炉なんです、鍋島青磁です。足がついていて、何かスタコラと歩いていくような感じで、すごいかわいいなと思うんですよ。何か聞いているような気がするんですよ。

司会 実はこの香炉、さっき人との出会いというお話がありましたけれども、この香炉を見つけるのに大変苦労したのですよね。本当に偶然の出会いという形で、これを貸してくださるという方と出会いまして、最後にびしょとおさまったんですよ。あちらにも鍋島のもう1つ絵皿がありますけれども、布物がほとんどなのですが、2点陶器のものがそろった。

では、ちょっともう一度大きい部屋に移っていただいて。この展示会のもう一つの見所が、あちらにあります非常に大きな人物の写真です。写真家の上田義彦さんと伊藤さんのコラボレーションで撮っていただいたわけですが、この写真にも非常に深い意味が込められているので、ちょっと御説明いただければ。



©藤田 正義

伊藤 この展示会をやろうと思ったときに、絶対に写真を入れたかったというのがあります。写真はやはり20世紀から21世紀にかけての大事な表現手段だと思っているので。上田義彦さんという方は、今、東京都写真美術館でも彼の展示会をやっているのですが、ぜひ見に行ってくださいなのですが、私が思うにはとても何かを宿しているカメラマンで、非常に客観的なのですが、想いというものがきちっと宿っている写真を撮られる方です。すごく忙しい方なのですが、4日間ですか、彼は私に拉致されたと言っていましたけれども、インドネシアに行って、それでこの方に会ったのですね。

どうしてインドネシアかという、25年ぐらい前に私はジョグジャカルタというところに行って、そこで何もかもバティックで、バティックとともに生活している人たちを初めて見たのですね。子供を背負うにも荷物を持つにも、着ているものはもちろんのこと、何もかもバティックで、私は余りのすばらしさというか、文様と文様が重なり合う色の美しさとか、そういうのにびっくりした覚えがあるのですね。それでジョグジャカルタに行こうと思ったのですが、もう今はそんなことはないといろんな方に言われて、もっと洋服を着ているしと。日本ワヤン協会の松本先生という方がいらっちゃって、その方と一緒にソロに行っただけです。そのときにどうしても老人の男性の写真を撮りたかったのですが、その人がどこにいるかというのは全くわからないで行ったのです。でも私は、もう毎日毎日祈っていて、3日目にこの方と道で会ったのですね。

王宮のそばの道で会って、歩き方がもう、杖を突いて歩いているんですけど、全然違っていて、かくしゃくとしてびしょと筋が通っているという歩き方だったのです。その後、あの方はどなたなのかと聞きましたら、彼は王家の出身で、ダンサーだったのですね。インドネシア舞踊の有名な人だったのです。それで写真を撮らせていただきたいというふうに申し入れましたら、

いいですよということで、お家に伺ったら、まだ子供が4歳くらいで、何度目かの奥さんと一緒にいらして、本当に怖いような方だったのです。これは宮殿のそばのドアのところ立っていただいて、いろいろ撮っていたのです。

そうしたら、撮っている最中に、しばらく何ロールか撮った後に、私のために写真を撮ってくれるかと聞かれたのです。私の弟子のために写真を撮ってくれると言われて、上田さんと一緒に、「もちろんいいですよ」と言ったのです。ずうっと教壇に立っていらして、弟子たちに自分の写真を残したいと思われたみたいで、いいですよと言ったら、突然今までの姿と全然違う格好をして、パッとまず持っていた杖を振り上げたのです。その写真にしようかどうか、ものすごく悩んだのですけれども、パッと振り上げて、私に向かって突き刺すように振り上げたのです。それはすごい瞬間で、ドラマチックだったし、私は何か怒られたような気がしたし、喝っていう感じだったのです。それからもういろいろなしぐさをなさって、この手も多分調べれば意味があると思うのですが、風なのか何なのか、大気の何かに対してメッセージしている動きなのですね。いろんな動きがあって、指をこうしたりとか。足が悪いので、体の中で踊られたのです。

ぜひ今回の展覧会にもいらしていただきたかったですけれども、3月か4月ごろに亡くなられたのです、残念ながら。でも、上田さんの写真が弟子たちのところに受け継がれるわけだし、あの彼の思いを撮れたのは、やはり上田さんしかいなかったと思うし、すごく印象深い1つなのです。

こちらは菊地さんとおっしゃる女性なのですが、更紗を本当に愛していらして、更紗以外のものもいろいろ造詣が深くていらっしゃる方なのですが、これは相当古い、15世紀、カーボンテストによると14世紀でもおかしくないという人物模様のインドの更紗です。この方の着こなしというか、半襟のことが帯のことが、帯締めのこと、帯揚げのこと、居ずまい、全部彼女がいろんなものを慈しみながら生きてきた感じが出ていて、女性が仕事をしていくというのはちょっと男性性がないとできない部分があるのですけれども、この方は本当に女性性の塊みたいな方で、そういう意味で女性性というのはすごく大事な要素になっていくと思うのです。だから、そういう象徴も込めて彼女を選んで撮影しました。この紅葉、楓は御自宅のもので、去年の10月に紅葉の時期に合わせて撮ったのです。何か御主人から愛でられ、愛でられて生きていらした方で、そういうこともすごく大事だと思うのです。

司会 今回、やはり更紗の力というのと、こういういい人生を重ねてきた方の力というのをここで2つ対比させて見せるというのが、伊藤さんのお考えだったわけですね。実はこの展覧会だけではなく、本日もあったのですけれども、1階のロビーのところで、舞踏家の元藤燐子さんに毎週踊っていただくことになっておりまして、それもやはり今のとつながってくる。

伊藤 そうですね。何か共鳴、いろんなものが共鳴し合うというのがこのビルでやるということの意味だったので、その大事な共鳴する1つの……。

司会 実は今、会場に元藤さんに来ていただきました。ご紹介します。(拍手)

元藤 今、上でごらんになって、何か私にお聞きになりたいことがありましたら、どうぞ。

質問 お元気のもとは何でしょうか。

元藤 私は昭和3年生まれでございますので、辰年の昭和3年



元藤 燐子さん

生まれです。ですから、ちょうど75歳になります。75年間背負ってきた私の人生の歴史といいますが、御存知かと思いますが、第二次世界大戦、私は7歳ごろから経験してまして、17歳のときに第二次世界大戦が終わりました。生きるということと死ぬことは、今の皆さんにとっては、死ははるかにありになると思えますけれども、私の戦争の時代は今の一瞬生きていられたらすごい幸せだった。爆音が聞こえてくると、もしかしたら私のところに落ちるんじゃないか。そんなことを思いながら、一瞬一瞬暮らしました。ですから私にとって、今が、今私がここでお話ししていること、今上で踊ったこと、それが私の人生のすべてで、エネルギーはそういうところなのかもしれません。

今日踊らせていただきましたのは、靴を背負って最初出てきましたけれども、ダンスというのは前面だけが皆さんのよく知っているダンスだと思うのですが、後ろに私の人生を背負って、そして重い靴を、靴は靴だけじゃなくて人生なんで、こういう形で出ました。そして私のいろんな思いを今度後ろに、靴に引きずられながら最後に下がっていきました。そんなこと、私がやはり経験した日本、そして昭和、それを引きずっていることが、私のエネルギーかと思えます。

司会 ありがとうございます。きょうごらんになれなかった方は、毎週水曜日5時半からこちらの1階でやっていますので、来週以降ぜひごらんいただければと思います。

伊藤さんの方で、今回元藤さんの靴の演出をなさったことも含めて、どういうやりとりがあったのですか。

伊藤 元藤さんは舞踏家として有名だと思うのですが、私が元藤さんを好きなのは、小さいときにはずっとヨーロッパのクラシックをやっていたらして、元藤さんの中にいろんなものが層になってあるのです。更紗が世界中を漂流していたのと同じように、元藤さんにもいろんなことがある。そういうものがうまく呼応できたら、この空間とも合っているのではないかなと思ったのです。元藤さんは童女のようなところがあるのです。年相応のいろんな礼儀とかはありますけれども、この年だからこういうメイクはできないとか、この年だからこういう衣装は着られないとか、そういうことは実はないんじゃないかと思うのです。元藤さん、本当にこれが似合っているんじゃないかと思うでしょう。だから、今日メイクも全部落として行こうかしら、どうしようかしらと言われたときに、皆さんに現実とまたちょっと違う時間をやはり味わっていただきたいと思って、そのままいらしたらいんじゃないでしょうかと言ったのですけれども。

元藤 皆さんが本当にお知りになりたいことをちょっとでもいいから話したいのですけれども、何かまだ質問おありでしょうか。

質問 大昔になるかもしれませんが、昨日のこのようにも思えますけれども、御主人さまとアスベスト館で初めて……。

元藤 ごらんになりましたか。

やはり過去を背負って前に行かなくちゃいけませんし、ごらんになってない方のためにちょっとだけ2〜3分お話ししますと、今日ごらんになった踊り、あれは舞踏といいまして、実は主人は土方巽と申しまして、舞踏をつくった人なんです。その土方巽と私は一緒に35年間生活をともにして舞踏をつくってきたのですけれども、今日ごらんになって、えっ、これはちょっとおかしいんじゃない、今まで見たダンスとちょっと違うとお思いになりませんかでしたでしょうか。と思って、一言だけ。ヨーロッパのダンスはとても体が上に伸びていくのですね。飛翔するといいますか、上に高く高く伸びていくのです。それですから、バレエはトゥシューズを履きますし、体も上にずうっと伸びていきます。今日私が踊った踊りは、要するにアジア、この展覧会も同じで、土から生まれた、土から誕生したエネルギーというんですか、それを体の中心にもらいまして、そして体の中心から動いていく。精神性をフォームで表現しているところが、ヨーロッパのダンスと違うと思うのです。それはなぜかと思ったときに、もしかしたら宗教の問題ではないか。ヨーロッパは天に神様がいて、アジアは土の中から生きとし生けるものが誕生していく。そういうところの違いじゃないかと思うんですけれども、これから私が水曜日に踊らせていただきますあと3回のパフォーマンスは、その土から沸き上がった踊り。そしてフォームでない、自分の精神、自分の魂を形にしていくということで、続けさせていきたいと思うし、こういう機会を与えてくださった伊藤さん、そして資生堂の樋口さん、おいでになった皆さんに本当に感謝します。ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。ちょっと元藤さんになりかわりまして宣伝させていただきますと、今週の土曜日から、川崎市の岡本太郎美術館で土方巽さんの回顧展が開催されまして、そちらでも元藤さんはまた何度か踊られるので、資生堂の水曜日とあわせて、ぜひそちらもごらんいただければと思います。

では、伊藤さん最後に何か一言。

伊藤 今元藤さんもおっしゃいましたけれども、これは思っても、茜だけでは茜色に染まらない展覧会なのですね。ですから、小侯さんが「いいよ、やろうじゃないか」と言っていたかなかったら、これは実現できなかったことなので、そういうことの何か宇宙の摂理というか、そういうものにつながる力を感じて感謝しています。

司会 では最後に、小侯からも一言。

小侯 これは僕が感謝される筋合いじゃなくて、多分樋口君もそうだと思いますし、資生堂のスタッフみんなそうだと思います。これをやって一番与えられたのは僕たちなのですね。今までの展覧会といったら、自分たちのことを否定するようですけども、1回見たらわかってしまうというか、済んでしまうのですが、これは何回来てても日に日に違うのです。今日もまた話を聞いていて、小さなところを逃がしたところをちょっとのぞいたりしました。

本當言いますと2年越しなのです、これは。最初話をしたときに、伊藤さんの目に星が4つも入っているんじゃないの、夢見てない？

みたいなつもりで聞いていましたけれども、一月たち、二月たち、日に日にテンションが、エネルギーが上がってきまして。僕は言うならば日常を生きていましたから、そこに伊藤さんというエネルギーを持った人が、非日常みたいなのが入ってきたときに、半分かき回されながら、半分それが終わった後何か違う、つまり日常で疲れたものと違う何かが残っていくのが、実感としてありました。これはお金も何もないところから始めましたから、お金がかかるとか、かからないという問題でやる、やらないということは考えてもしょうがない。これはやってみて受けるものがたくさんあれば、結果的にそれでいいというふうに踏み切るしかない1年ぐらい前に思いました、始めました。

伊藤さんはさっき願いと言いましたけれども、生きていくことに対するポジティブなもの、ある意味で生命の肯定みたいなものを持っている人が、そのように動いていけば、そのように世界は変わっていくという、あるいはそのように訪れてくるということが本當なんだろうと思います。ですから、もし自分が不幸だと思ったりつらいことがあったとすれば、多分自分に不幸の芽があって自分が不幸を寄せているということではないかなということも、この仕事をしていて感じましたし、それからもう一つ、先ほどグローバルの話をされましたけれども、これは日本の、あるいは西洋的なスタイルを生きてきた僕たちのこれからの課題だと思えますが、ここでやられていることは、生命的なことを確認したいという以上に、ある意味では非分離であるということをどこでつくれるか。近代というのは、分離することで全部効率よく動いてきたわけです。大量生産もそうですし、それから人間関係もそうだし、システムもそうです。分離することで機能は上がり、効率もよくなりましたけれども、そのことのために生命を持った僕たちは生きているのかと、ちょっと考えるだろうと思うのです。今大事なことは、非分離であり、存在が非分離である。生きていることと死んでいることとはどこかで地続きで、この瞬間があるというふうにと考えると、常に非分離である。

それからこの鏡というのはキーワードで、ある意味では向こうの世界とこっちの世界でもあれば、自分と他者の世界でもあるし、この世界そのものがずっとつながっていくという時間の流れを、この鏡という1枚の面を通して出すことができている。伊藤さんがそう考えてされたことについて、こういうふうに見てみてよくわかった。

もう一つ、普通は物について本当に愛していなかったら、多分後生大事に手を触れるな、布は全部柄を見せるって、全部まんまで並べていくということをしたと思います。伊藤さんは、この物が大事であって、この物の命を見せたいと思いましたから。本當はこの展示も不親切ですよ。あの裏側どうとか、洋服がどうとか全部見たいと思うのですが、そんな裏側を見なくても、この存在で服の持っているものは、よく見えてきてしまう。そういう展示の仕方を全部されています。これだって、長いものをここまでしか見せていませんけれども、全部見えたから実はわかったかというところではなくて、こういうふうに表示をするということで、その方法論のすばらしさを通して本質まで見えるということを、伊藤さんは今回これでおやりになっています。これは、だれにもやはりできなかった。学芸員だろうと展覧会の専門家とかであろうとできなかった。やはり伊藤さんの生命性と、それからもともと持っているクリエイティブなもの、それから表現をするということについての長い時間みたいなものがさせたというふうにしかならない。

本当に、商売としてとか、展覧会の動員数とかそんなことでなくて、これを見せたいという気が本当にするのですね。とにかく見ていただきたい。

毎日このように伊藤さんがしゃべってもらったらもったいいなと思いますけど、そうもいきませんが、初めて自分たちの、本当にみんなに見せたいと思うものが、今回の展覧会です。

元藤さんのことも、実は最初は僕の頭の中でつながらなくて、単純に言うとおもしろいと思っただけなのですが、その後やっていることと踊りのことを考えますと、資生堂が一生懸命叫んでいるエイジングという言葉のもっと本質的なことがここにあるじゃないか、つまりエイジングというのは年をとらないとか皮膚がどうですよとかという理念的なことを一生懸命言うことも大事でしょうけれども、このことが生きることなんだ、生きることということはエイジングであるのだということのそのものなんですね。

それはどういうことかということ、コンセプチュアルじゃないと思っただけですね。つまり肉体だと思っただけです。何でも今のものってコンセプチュアルのものが、つまり脳みその方が先ですから、そこで1回翻訳していくみたいな弱さがあると思いますけれども、それよりも強いなと思っただけは、そうではないということが元藤さんの踊りの中にはあって、それはやはり言葉にはできないものだなというふうに思いました。

先ほど言いましたように、よくよく考えてみると、実は時間というのは過去も未来もなく、この一瞬というものしかない。この一瞬に対して、その前の時間と、この一瞬に対してこれから来る時間はある。現在と過去と未来というのが、実は分離されているものではなくて、私たちはこの瞬間しかない。この瞬間は現在であって、瞬間に過去であって、ちょっと前の未来であるということになると、元藤さんの70何年の人生というのは、単に過去と何かという問題ではなくて、今ここにおられる元藤さんが一瞬にして見せている姿の中にあらゆるものが詰まっている。それを僕はあの舞踏の中でいいでしょうか、踊りの中で間違いなく何かを見せているなと思いました。全部こうやってでき上がったのを見て、僕は初めてこのことの意味を認識しているというのが実態で、伊藤さんに感謝される筋合いではなくて、私たちの方が本当にすてきな大事なものを得ることができました。

今日いらした人は、間違いなく得たと思います。どうも伊藤さん、ありがとうございました。皆さん、長い時間ありがとうございました。(拍手)

司会 では、時間もちょっと押しておりますので、本日はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。